(3) 他の動物

1) 軟体動物類

① カタツムリ（腹足綱有肺目オナジマイマイ科・ニッポンマイマイ科）

ア　対象種

クチベニマイマイ、ナミマイマイ、ウスカワマイマイ等

イ　生息情報

全集落

ウ　採録した呼び名

・　一般的な和名　　デンデンムシ

・　その他　　デデムシ、マイマイ

※　デンデンムシ

エ　生息及び呼び名の状況

貝殻を持つ陸生巻貝であり、梅雨時期になると庭や身近なブロック塀などでよく見かけられ、現在も郡内全集落に生息する。

本類の呼び名としては、「デンデンムシ」や「デデムシ」をはじめ計3種を採録した。

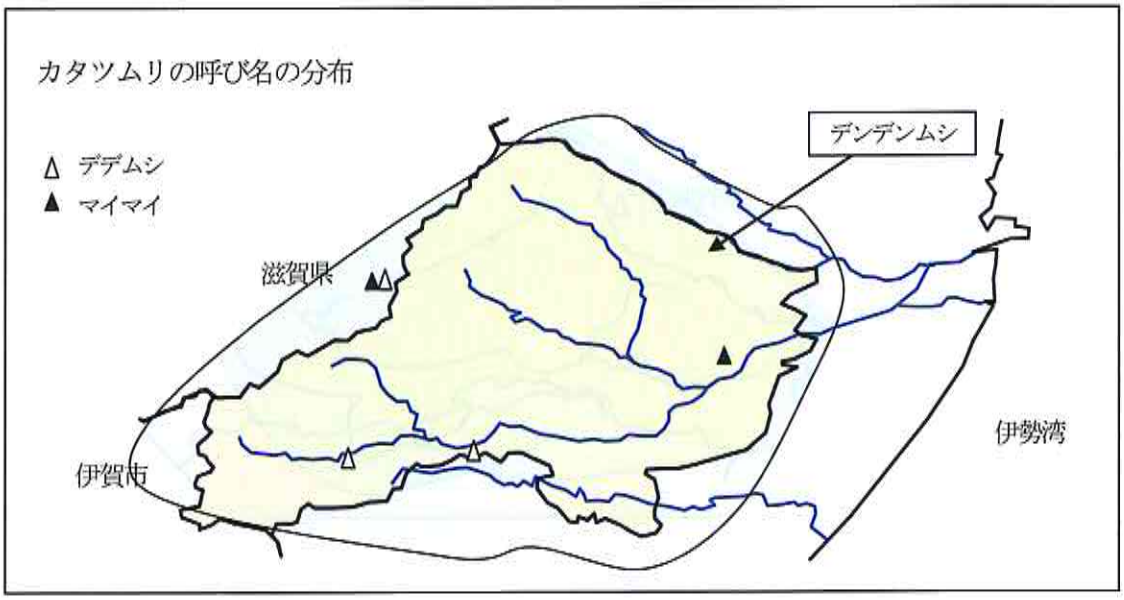
郡内全域で一般的な和名である「デンデンムシ」と呼ばれたほか、一部の集落で「マイマイ」や「デデムシ」がみられた。

なお、「カタツムリ」とも呼ばれたが、採録対象としなかった。

オ　その他

梅雨時期等における本類の出現に関して次の伝承を採録した。

・「デンデンムシが出てくると雨（が近い）」



② ナメクジ（腹足綱有肺目ナメクジ科）

ア　対象種

　　ナメクジ

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　標準和名　　ナメクジ

・　その他　　クジラ、ナメクジラ

エ　生息及び呼び名の状況

　貝殻を持たない陸生巻貝であり、庭石や落ち葉の下などの湿気た所等でよく見かけられ、現在も郡内全集落に生息する。

　本種の呼び名としては、「ナメクジ」や「ナメクジラ」をはじめ計３種を採録した。

　郡内全域で標準和名である「ナメクジ」や「ナメクジラ」と呼ばれたが、とりわけ当時の高齢者は「ナメクジラ」とよく呼んでいたという話が多くみられた。

　そのほか、一部の集落でその短縮形である「クジラ」もみられた。

オ　その他

　「利尿にいい」、「ナメクジは腎臓の薬」と言って（オブラートに包んで）そのまま飲み込んだという話のほか、本種の出現に関して次の伝承を採録した。

・「ナメクジ（ラ）が出てくると雨（が近い）」

③ タニシ（腹足綱有肺目タニシ科）

ア　対象種

マルタニシ、ヒメタニシ、オオタニシ

イ　生息情報

ほぼ全集落

ウ　採録した呼び名

・　一般的な和名　　タニシ

・　その他　　タツブ、タツボ、ツブ、ツブガイ

エ　生息及び呼び名の状況

主として水田や水路、ため池等の泥気の多い止水域に生息する淡水生巻貝である。当時は山間の一部を除き郡内のほぼ全集落に生息したが、戦後のほ場整備に伴う乾田化や水路のコンクリート化の進展により生息環境が激変し、現在はため池のほか出水のある土水路、水田等昔ながらの生息環境が残る限られた場所にのみ生息する。

本種（類）の呼び名としては、「タニシ」や「ツブ」をはじめ計５種を採録した。

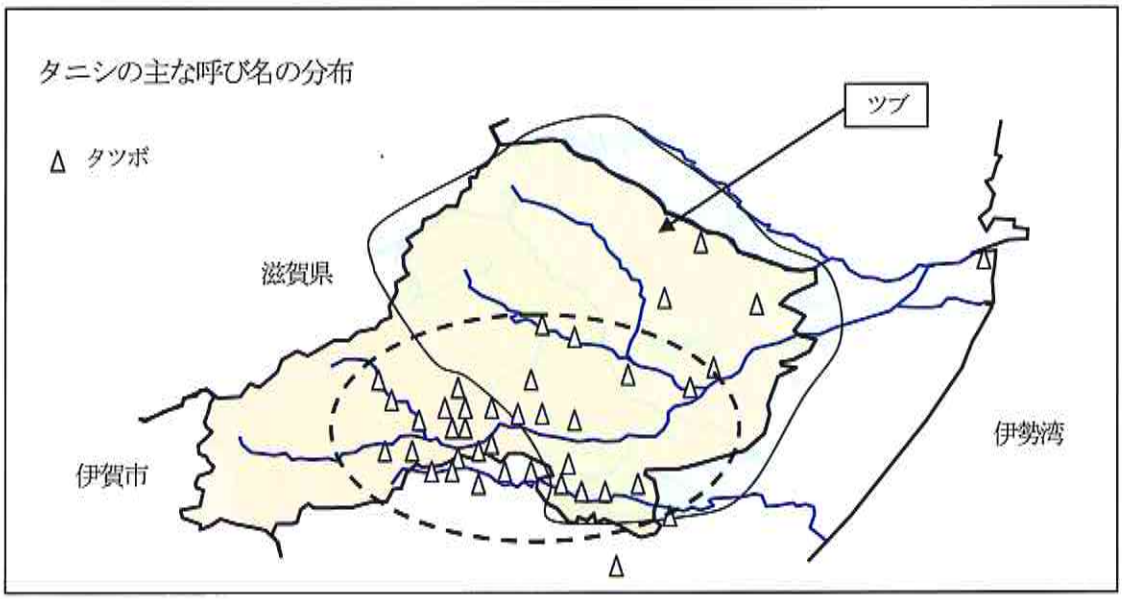
郡内全域で一般的な和名である「タニシ」と呼ばれたほか、昔からの呼び名としては郡内は大きく２つ地域に分かれる傾向がみられ、郡中部から東部・北部の広い地域では「ツブ」と呼ばれたほか、加太地区を除く郡西部から南部にかけての地域を中心として「タツボ」が多くみられた。

オ　その他

当時は水田等に多数生息し、それらを取り食材としたり、茹でて皮をむいて売りに行ったという話がみられた。また、田の泥に潜っていたタニシが３月下旬になると出て来るようで、住民はそれを捕って食べ、泥を取り込んでいないことから「４月のタニシはうまい」と言ったという話のほか、本類の食用としての利用に関して次の伝承等を採録した。

・　「ツブはいいが、ゴンナイツブを食べると死ぬ」と言った。

・　タニシを料理する時に「『山椒腐れ、味噌腐れ、ツブ取るおかやんのけつ腐れ』とツブが泣いている」と言った。



④ カワニナ（腹足綱吸腔目カワニナ科）

ア　対象種

カワニナ、クロダカワニナ等

イ　生息情報

全集落

ウ　採録した呼び名

- 形　状　　マキガイ
- 生息場所　　ミゾガイ
- 光ること　　ホタルガイ
- タニシとの混同　　タニシ
- その他　　アカンツブ、カワタニシ、カワニシ、グンナイツブ、ケセロ、ケセロガイ、ゴーガ、ゴガイ、ゴーガイ、ゴナ、ゴーナイ、ゴーナイツブ、ゴノシガイ、ゴンダイツブ、ゴンナイツブ、ツブガイ、ドンゴロツブ、ニナ、ニナガイ

エ　生息及び呼び名の状況

主に流れの緩慢な水路に生息し、ホタルの幼虫にとり重要な餌となる小型の淡水生巻貝である。コンクリート化された水路でもよく見かけられ、現在も郡内全集落に生息する。

本種（類）の呼び名としては、「マキガイ」や「ゴーガイ」をはじめ計23種を採録した。

小川などでよく目につく生き物であるが小型で食用に向かず有用でないこと等から、集落や人により異なる多様な呼び名で呼ばれ、中には呼び名を採録できなかった集落もみられた。

郡内の広い地域で形状からの「マキガイ」と呼ばれたほか、加太・坂下地区及び昼生地区で「ゴナ」、「ゴーナイ」、庄野地区を中心として「ゴガイ」、「ゴーガイ」と呼ばれた。また、御幣川流域集落では「ゴンナイツブ」がみられ、タニシがほとんど生息しなかった加太地区や坂下地区では人によっては本種を「タニシ」とも呼ぶ場合もみられた。

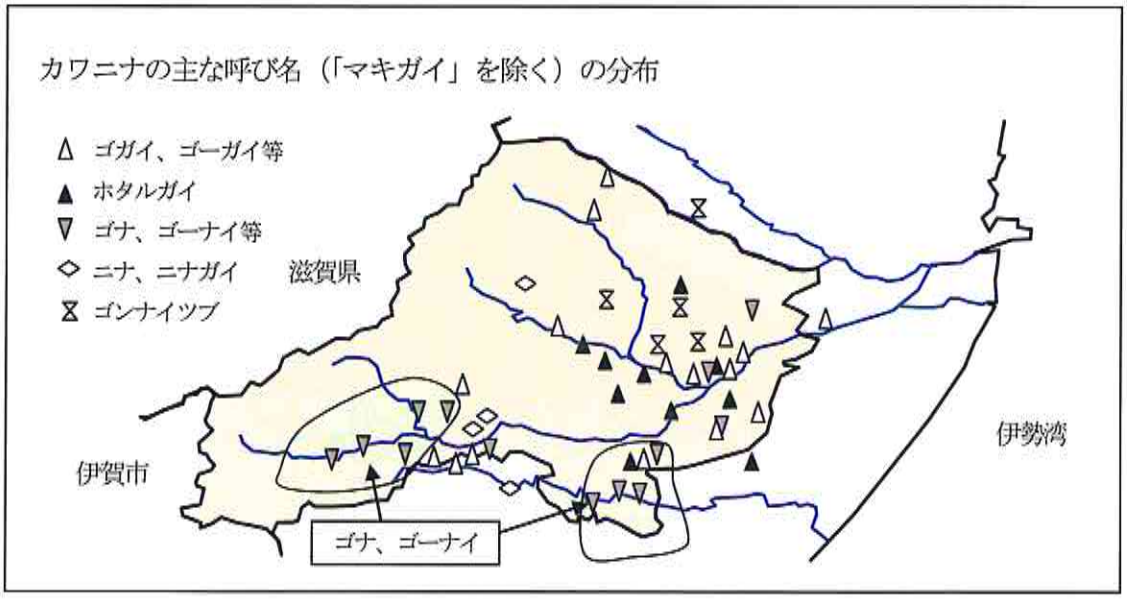
加えて、鈴鹿川中流域の一部の集落で「ホタルガイ」を採録し、ホタルの幼虫による本種捕食時の光に由来する呼び名とも考えられる。

なお、隣接地域として調査を行った芸濃町楠原では「ラッパガイ」を採録した。

オ　その他

タニシと関係して次の伝承を採録した。

- 「ツブはいいが、ゴンナイツブを食べると死ぬ」



⑤ ドブガイ（二枚貝綱イシガイ目イシガイ科）

ア　対象種

ドブガイ等

イ　生息情報

ほとんどの集落

ウ　採録した呼び名

- 生息場所　　ドブガイ、ドロガイ、ミゾガイ、ミトガイ
- 体色　　カラスガイ
- その他　　オミガイ、バカガイ、ホミ、ホミガイ、ホンミ、ホンミガイ、ミソガイ
- 大型個体　　アオガイ、オオミソガイ、デンショガイ、デンジローガイ、ヤマソガイ

エ　生息及び呼び名の状況

かつて農業用の水路やため池等で当たり前のように見かけられた黒色の淡水生二枚貝であり、食用にも利用され当時は山間の一部を除き郡内のほとんどの集落に生息した。ため池等に生息しこぶし大の大型になるものと、水路に生息しそう大きくならない種類があるようである。昭和30年代以降の水路改修やため池の管理放置等により生息環境が適さなくなり、現在では他の二枚貝類（シジミを除く。）と同様に昔ながらの環境を保った限られた場所でのみ生息する。

本種の呼び名としては、「ミソガイ」や「ホミガイ」をはじめ計12種を採録した。

生息域でなかった加太・坂下地区を除き、郡内では大きく3つの呼び名の地域に分かれ、郡内の北部・東部を中心とした広域で「ミソガイ」と呼ばれたほか、白川地区では「ホミガイ」、「ホンミガイ」と呼ばれ、また郡南部では「ミゾガイ」と呼ばれる傾向がみられた。そのほか、一部の集落では黒い体色からの「カラスガイ」もみられた。

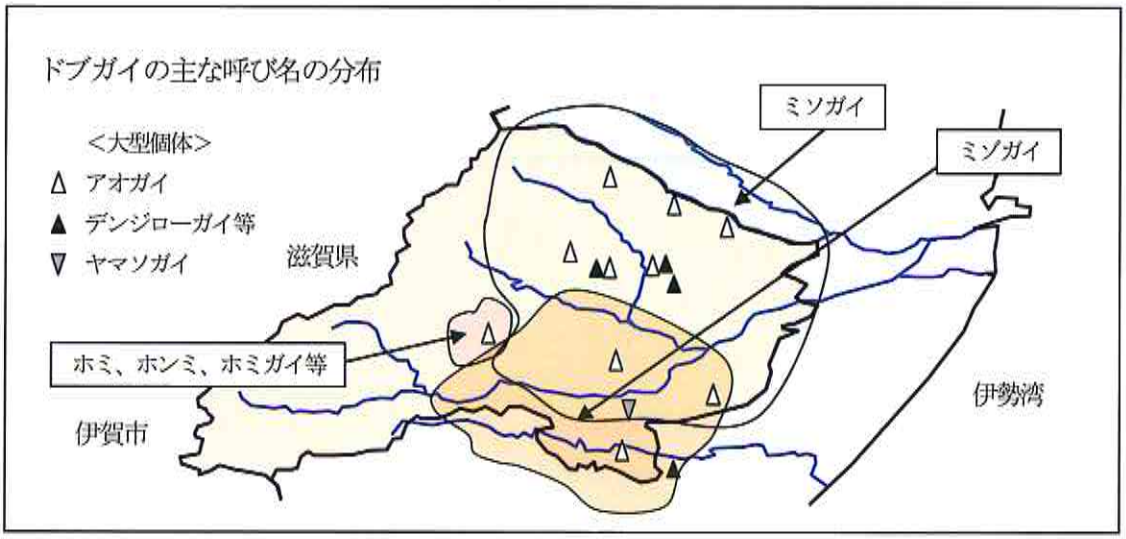
なお、生息場所からの「ドブガイ」や「ミゾガイ」、「ミトガイ」は、集落や人によっては本種に限らずそうした場所に生息した二枚貝類の呼び名（総称）としても使われたようである。

一方、ため池などでみられた特に大型個体の呼び名としては、「アオガイ」や「デンジローガイ」をはじめ計5種を採録した。こうした呼び名は一部の集落でのみ採録し郡内で一般的ではなかったが、離れた集落でもみられたことからかつては広域で使われた可能性がある。

なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町山中では「タブガイ」、伊賀市柘植町では「ニタリガイ」を採録した。

オ　その他

当時は本種をよく味噌などで煮込んで食用としたという話とともに、そこから「ミソガイ」の呼び名がきているという話がみられた。



⑥ その他の貝類

a) 畑等にいる小さな巻貝（キセルガイ類（有肺目キセルガイ科））

ア　対象種

ナミギセル、キセルガイモドキ等

イ　採録した呼び名

・　生息場所　　ハタケガイ

・　その他　　デンベ

ナミギセル

ウ　呼び名の状況

その他の貝類としての聴き取りで、畑等にいる小さな巻貝の呼び名として「ハタケガイ」と「デンベ」の計２種を採録した。

対象種としてはナミギセルやキセルガイモドキ等があげられる。

木の小さなうろや朽ち木、落ち葉、野菜の捨て場等、畑地を含め湿気た所で見かけられる2～3 cm程度の細長い貝殻をもつ小型の陸生巻貝である。

小型で有用種でないことや生息自体が住民にあまり意識されていなかったこと等から郡内では呼び名はほとんどなかったようで、一部の集落でのみ、畑にいることからの「ハタケガイ」、小さいことを指すという「デンベ」がみられた。

エ　その他

関町小野では本類の標準和名に類する呼び名（「ケセロガイ」）が、カワニナの呼び名として使われていた。

b）細長い二枚貝（トンガリササノハガイ（二枚貝綱イシガイ目イシガイ科））

ア　対象種

トンガリササノハガイ

イ　採録した呼び名

・　形状　　タテガイ、チンボガイ、ナガガイ

・　生息場所（混称）　　ミゾガイ

ウ　呼び名の状況

その他の貝類としての聴き取りで、主に水路で見かけられた細長い淡水生二枚貝の呼び名として「ナガガイ」や「タテガイ」をはじめ計4種を採録した。

対象種としてはトンガリササノハガイがあげられる。

体長10cm強の黒色の細長い貝であり、当時は郡内の多くの集落で水田地帯を流れる小川等に生息したようであるが、現在では見かけられない。

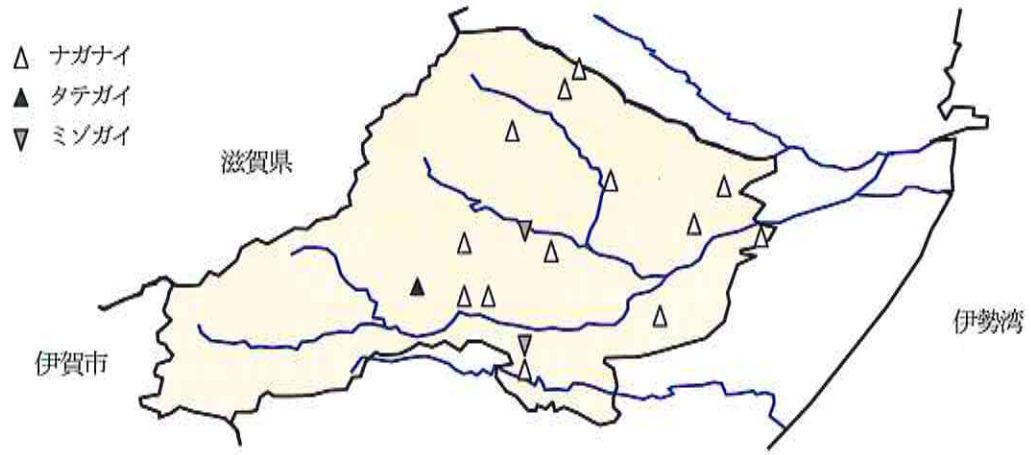
郡内の広い地域で集落数としては限られるものの細長い形状から「ナガガイ」を採録したことから、広くそのように呼ばれたようであるほか、関町鷲山で「タテガイ」がみられた。また形状からの俗称でもよく呼ばれたようである。

固有の呼び名を採録しなかった集落では、小川（溝川）に生息した他の淡水生二枚貝とともに生息場所から「ミゾガイ」等と呼ばれたものとみられる。

エ　その他

当時はどこでも当たり前のように見かけられたというタナゴ類が現在、郡内ではほとんど目にすることがない。シジミを除く淡水生二枚貝にはタナゴ類が産卵することから、水路改修等に伴いこうした貝類が郡内でほぼ絶滅状態となったことが、タナゴ類が姿を消したことと密接に関係している。

トンガリササノハガイの主な呼び名の分布



c）小型の二枚貝（シジミ（マシジミ）（二枚貝綱マルスダレガイ目シジミ科））

ア　対象種

マシジミ

イ　生息情報

ほとんどの集落

ウ　採録した呼び名

・　一般的な和名　　シジミ、シジミガイ

・　その他　　アブラシジミ、カワシジミ

エ　生息及び呼び名の状況

その他の貝類としての聴き取りで、小水路で見かけられた小型の淡水性二枚貝の呼び名として「シジミ」や「カワシジミ」をはじめ計4種を採録した。

対象種としてはマシジミがあげられる。

水路のコンクリート化が進んだことから、生息数としては当時に比べ格段に少ないが、現在でも山間の一部を除き郡内の多くの集落で見かけられる。

郡内全域で一般的な和名である「シジミ」と呼ばれたほか、集落や人によっては体色で区別した「アブラシジミ」や「カワシジミ」もみられた。

オ　その他

本種の食用として利用に関して「シジミを食べると病気が治る」や「肝臓によい」と言ったという話がみられた。

d）不明種（二枚貝綱）

ア　採録した呼び名

・　体　色　　ババガイ

・　殻が柔らかい状態　　ベショガイ

・　薄い形状　　ベタガイ

・　その他　　バカガイ

イ　呼び名の状況

その他の貝類としての聴き取りで、種別がはっきりとしない呼び名を計4種採録した。

「ババガイ」、「バカガイ」は、当時、水路等に多く生息したドブガイ、マツカサガイ等の呼び名とみられるが、聴き取りからはその種別がはっきりしなかった。

また、殻が柔らかい状態の貝として「ベショガイ」、また薄い状態の貝として「ベタガイ」もみられ、生息した淡水生二枚貝に共通する呼び名の可能性がある。

2) 環形動物類

① ミミズ（総称）（貧毛綱）

ア　対象種

シマミミズ、フトミミズ類、イトミミズ等

イ　採録した呼び名

・　一般的な和名　　ミミズ、メメズ

ウ　生息及び呼び名の状況

庭などの土を掘ると見かけられ、土中の有機物等を栄養分とする目や手足のない紐状の生き物であり、現在も郡内全集落に生息する。

本種総称としては、「ミミズ」と「メメズ」の計2種を採録した。

郡内全域で一般的な和名である「ミミズ」と呼ばれたほか、当時の高齢者はよく「メメズ」と呼んでいたという話がみられた。本類の呼び名の聴き取りからもしばしば「メメズ」とともに、種別毎の呼び名でも同様に「〇〇メメズ」と口をついて出てきた。

ハタケミミズ

エ　呼び名がみられたミミズの種類

本類の聴き取りにおいては、主として次の4種に固有の呼び名がみられた。

当時、農林業が盛んで多くの家で馬や牛、ニワトリ等の動物が飼われていたことから近くに多数生息したことに加え魚釣りの大事な餌として使われ、本類は住民にとりとても身近な生き物であったようである。

・　シマミミズ：　堆肥や馬糞等のある場所に多く生息し、魚釣りの餌としてよく使われたミミズである。

・　フキソクミミズ等：　畑を掘るとよく見かけられ、大型のものとなると一つの白い環が目立ち、ウナギ釣りの餌としてよく使われたミミズである。

・　イトミミズ（エラミミズ）：　ドブと呼ばれた溝や年中水が絶えない田んぼで土中から突き出た細長い体を揺らした姿でよく見かけられた水生ミミズである。

・　シーボルトミミズ：　主に山林に生息し体長30㎝程度にまでなり、青光りするとも言われる大型ミミズである。

オ　その他

ミミズを煎じてキンカンの汁を入れて飲むと体によく体の芯の熱をとるといった療法の話や、モグラに加え近年出没が多いイノシシの餌となっているという話のほか、次のような伝承等を採録した。

・　「ミミズはジーと鳴く」

・　「ミミズは灯をとぼす」

・　「ミミズが（たくさん）出てくると天気が悪くなる」

② シマミミズ（貧毛綱ツリミミズ科）

ア　対象種

　　シマミミズ

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

- 体　色　　アカノミミズ、アカミミズ
- 模　様　　シマミミズ、フシミミズ
- 町などにいること　　エキミミズ、カメヤマミミズ、ナゴヤミミズ、マチミミズ
- その他　　クルミミミズ

エ　生息及び呼び名の状況

当時、身近に溜められた堆肥や馬糞、また人家で飼われたにわとりの小屋近くの土中を掘ると多く見かけられ、魚釣りの餌としてよく使われた生き物である。

当時は郡内全集落に生息したが、現在ではそうした場所が身の回りからほとんどなくなったことから目にすることは少ない。

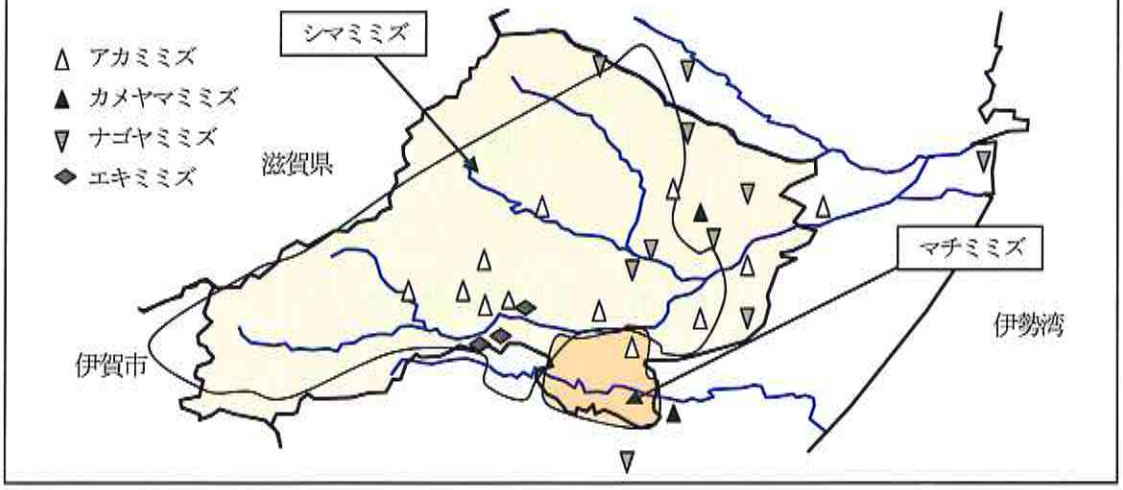
本種の呼び名としては、「シマミミズ」や「ナゴヤミミズ」をはじめ計９種を採録した。

郡内では広い地域で標準和名である「シマミミズ」と呼ばれたほか、人の活動が多い所に多く生息したことから昼生地区から鈴鹿川南岸の亀山地区で「マチミミズ」、郡東部で「ナゴヤミミズ」、神辺地区の一部では「エキミミズ」と呼ばれ、また集落によっては「カメヤマミミズ」もみられた。

一方、そうした呼び名とともに集落や人によっては体色からの「アカミミズ」も使われ、一部の集落では「クルミミミズ」や筋を節に見立てた「フシミミズ」もみられた。

なお、隣接地域として調査を行った津市高野尾町や四日市市山田町では「ナゴヤミミズ」を採録した。

シマミミズの主な呼び名の分布



③ 畑地にいるミミズ（貧毛綱フトミミズ科）

ア　対象種

フトミミズ類（フキソクミミズ等）

イ　生息情報　　全集落

ウ　採録した呼び名

- シマミミズとの対比　　イナカミミズ
- 生息場所　　ツチミミズ、ドロミミズ、ハタケミミズ、ヤブミミズ、ヤマミミズ
- 跳ねること　　ハネミミズ
- 体色　　アカミミズ
- その他（大型であること等）　　アメリカミミズ、オスミミズ、オヤミミズ、カミサンミミズ、カミナリミミズ、クマミミズ、ダイコクミミズ、ダイコンミミズ、ダンゴミミズ、チンボミミズ、テッポミミズ、テッポーミミズ、テンテンミミズ、ドッチンミミズ、トノサマミミズ、ドバミミズ、ドンビミミズ、ドンボ、ドンボミミズ、ニホンミミズ、フトミミズ

フキソクミミズ

エ　生息及び呼び名の状況

畑やごみ・落ち葉等を置いた庭などを掘ると土中から出てくる生き物である。種類としては数種あるようであるが、赤く細長いシマミミズに比べ比較的太長く、大きなものとなると一つの白い環が目立つミミズに代表され現在も郡内全集落に生息する。

本類の呼び名としては、「ドロミミズ」や「ダイコクミミズ」をはじめ計29種を採録した。

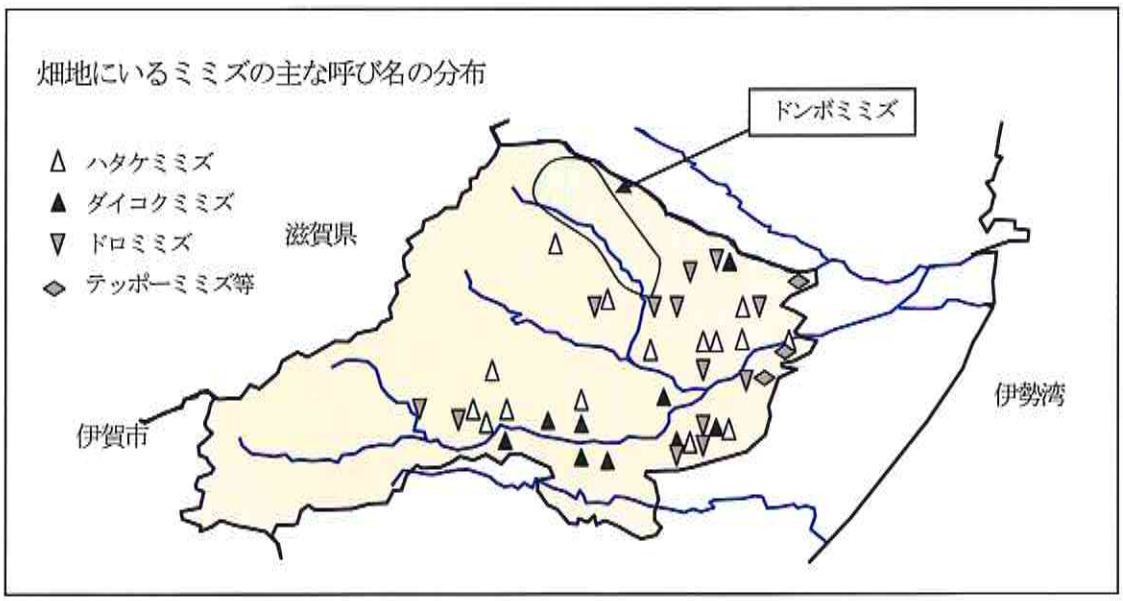
集落により多様な呼び名で呼ばれたようで、大きい集落では人により異なる場合もあった。郡内の広い地域で「ハタケミミズ」、地域的には鈴鹿川本流沿いに「ダイコクミミズ」が比較的多くみられたほか、深伊沢地区や国府地区を中心に「ドロミミズ」、椿地区で「ドンボミミズ」と呼ばれた。また、集落によってはシマミミズを「マチミミズ」と呼ぶ一方、本類は田舎に生息する「イナカミミズ」として、対照的な呼び名を使う場合もみられた。

なお、隣接地域として調査を行った鈴鹿市御薗町では「ドンドンミミズ」、四日市市塩浜では「トビミミズ」、「ギンミミズ」、伊賀市柘植町では「オニミミズ」を採録した。

オ　その他

当時は流し針でウナギを捕るための餌としてよく使ったという漁法や、しごいて煎じて飲んで熱さましとして使ったといった療法の話のほか、本種の出現に関して次の伝承を採録した。

- 「ヤブミミズが出てくると雨（が近い）」



④ イトミミズ（貧毛綱イトミミズ科）

ア　対象種

　　エラミミズ

イ　生息情報

　　ほとんどの全集落

ウ　採録した呼び名

- 体　色　　アカゴ
- 動　き　　クビフリ、ユリコ、ユリミミズ
- 生息場所　　ドブミミズ、ミズミミズ
- 小さいこと　　ミジン、ミジンコ
- 一般的な和名　　イトミミズ
- 他種との混同　　ボーフラ
- その他　　キンギョノエサ、クズ、ジンコ、ヤシロミミズ

エ　生息及び呼び名の状況

　水路改修や下水道整備のほか、ほ場整備による乾田化が進んだ現在では目にする機会はほぼないが、当時はドブと呼ばれた汚水の流れる溝や年中水が絶えない田んぼで土中から突き出た細い体を揺らした姿でよく見かけられた水生ミミズであり、山間の一部を除き郡内のほとんどの集落に生息した。

　本種の呼び名としては、「ミジンコ」や「ユリミミズ」をはじめ 14 種を採録した。

　生息数が少なく呼び名が採録されなかった山間の集落を除き、郡内では大きく分けて 4 つの呼び名の地域に分かれた。集落によっては複数の呼び名が使われ、それらが地域的に一定のまとまりを示しながらも入り混じるように分布した。

　郡北東部の広い地域で「ミジンコ」と呼ばれたほか、国府地区や昼生地区、安楽川南岸の集落では主として「アカゴ」、亀山地区の鈴鹿川南岸から河芸郡明地区や安楽川沿いなどで「ユリミミズ」と呼ばれ、神辺地区では生息場所からの「ドブミミズ」がみられた。

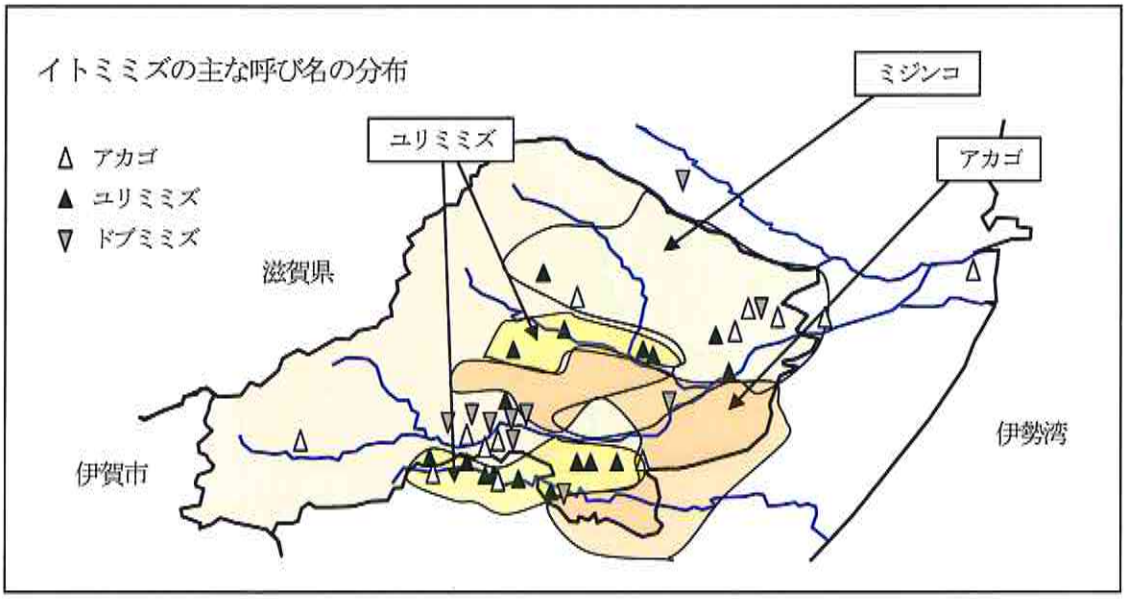
　一方、魚の生餌という用途から「キンギョノエサ」という別名も使われたようである。

　なお、隣接地域として調査を行った芸濃町明地区では「ユリミミズ」、四日市市山田町では「ドブミミズ」を採録した。

オ　その他

　水路改修やほ場整備等が進んだ現在では想像もできないが、当時の生活環境等から、本種は住民に身近な生き物であったようである。

　なお、アカムシユスリカの幼虫も郡内では「アカゴ」と広く呼ばれた。



⑤ シーボルトミミズ（貧毛綱フトミミズ科）

ア　対象種

シーボルトミミズ

イ　生息情報

広がった山林が続く集落

ウ　採録した呼び名

- 生息場所　　ヤマミミズ、ヤマノミミズ
- 体　色　　アオミミズ
- 大型　　オーミミズ

エ　生息及び呼び名の状況

主として山地に生息し、青い体色が目立ち30cmを超える体長ともなる大型のミミズである。

日常的に見かけられるものではないものの、当時は鈴鹿山系から山林が連なる集落で、「青光りする大型のミミズがいた」という話が少なからずみられ、平地の山林を含め広範囲に生息したようである。

本種の呼び名としては、「ヤマミミズ」や「アオミミズ」をはじめ計4種を採録した。

普段目にすることのない生き物であることから固有の呼び名はほとんどなかったようであるが、山辺の集落で「ヤマミミズ」又は「ヤマノミミズ」と呼ばれたほか、一部の集落で体色に由来する「アオミミズ」がみられた。

一方、畑で見かけられる大型ミミズを表す呼び名として「カミサンミミズ」や「トノサマミミズ」等を採録し、本来本種を表すものではないかと考えられる面がみられたがはっきりとしなかった。

本種は現在でも亀山市安坂山町坂本や鈴鹿市山本町では集落内にある竹藪やごみの溜った所で生息するようであるほか、森林組合作業員の話では鈴鹿山系の山林や側溝など落ち葉がたまった所ではしばしば見かけられるという。

なお、地域外であるが御在所岳の山頂で昔に見かけたという話とともに、県外の延岡市北方では「カンタロミミズ」と呼んだという話も併せて採録した。

オ　その他

本種としての採録にあたっては、体長30 cm程度と青色の体色の2点を満たしたものとした。

シーボルトミミズの呼び名の分布

⑥ ヒル（ヒル綱）

当時、「みず田」、「のま田」、どぶ田」等と呼ばれた年中水の絶えない水田が広がっていた郡内において多くの水生ヒルが生息し、そうした所に入ると周囲から素早く寄りつき足にとまり吸血することから、強く忌避され悪印象の生き物である。

また、山林等には陸生ヒルが生息し、形状のよく似た他種であるウズムシ類の一部を含めて強く「ヒル」と認識され、その呼び名が付けられていた。

これらは総称のほか、田、川、山林等の生息地、大型又は牛馬についている状態、体色・形状等からほぼ名づけられていたことから、そうした呼び名のもととなった区分により調査、整理をした。

⑥-1　調査項目毎の採録した呼び名

a) ヒル（総称）

ア　対象種

チスイビル、ヤマビル、コウガイビル等

イ　採録した呼び名

・　一般的な和名　　ヒル

ウ　呼び名の状況

本類総称としては、「ヒル」の１種を採録し他の呼び名はみられなかった。

なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町や伊賀市柘植町では「ヘル」を採録した。

エ　呼び名がみられたヒルの種類

本類の聴き取りにおいては、ヒルとして認識されていたものは主として次の８種があり、それらが６つの区分で固有の呼び名が見られた。

・　水生ヒル：　チスイビル　（ヒルド科）
　　ウマビル　（ヒルド科）
　　ハバヒロビル、ヒラタビル　（グロシフォニ科）
　　（※　シマイシビル　（イシビル科））

・　陸生ヒル：　ヤマビル　（ヒルド科）
　　クガビル、キバビル　（ヒルド科）

・　他　　種：　コウガイビル　（ウズムシ綱）

上記のうち、主に川に生息し、川石の下などで見かけられる水生のハバヒロビル、ヒラタビルは、当時の人たちにはあまり認識されず、固有の呼び名はごく一部の集落でみられただけで一般的ではなかった。同様に水生のシマイシビルはチスイビル等と混同されたようであるがはっきりとしない。

オ　種別毎の呼び名の概況

ヒルの種別毎の認識や呼び名での区別は、大まかには種別に準じたものであったようであるが、集落や人によっては水田での農耕用に使った牛や馬についたものが「ウシビル」、「ウマビル」と呼ばれた場合があったことや、「シマビル」や「マビル」の対象種が集落等により異なる面があり、チスイビルとウマビルとの間で混同がみられた。

b) 水田にいるヒル

ア　対象種

チスイビル、ウマビル

イ　採録した呼び名

・　生息場所　　タビル、タービル、タンボビル

・　特定の田　　シノダビル、ノマビル

ウ　呼び名の状況

当時、郡内に多くあった藪や林に隣接し年中水が絶えることがない「みず田」、「のま田」、「どぶ田」等と呼ばれた水田や池から水を引いた田んぼで多く見かけられ、そうした所に生息するヒルの呼び名としては、「タビル」や「タンボビル」をはじめ計5種を採録した。

対象種としては、チスイビルとウマビルがあげられ、共に「タビル」等として呼ばれたほか、年中水が絶えない田に多くいたことから一部の集落で「ノマビル」や「シノダビル」とも呼ばれた。これらは人に付くものと認識され、チスイビルに代表される呼び名でもある。

c) 人に付く水生ヒル

ア　対象種

チスイビル

イ　採録した呼び名

・　体の模様　　シマビル

・　ついて離れない例え　　カミナリヒル、カミナリビル

・　血を吸い膨張した状態　　ダンゴビル、ドンビ、ドンビル、ドンビン、ドンビンタン

・　その他　　マビル

ウ　呼び名の状況

主として水田や池に生息し、人に付くヒルの呼び名としては、「マビル」や「ドンビル」をはじめ計9種を採録した。

対象種としてはチスイビルがあげられ、体の模様、血を吸い膨張した状態等でそれぞれ呼び名がみられた。

d) 人に付かない大型水生ヒル

ア　対象種

ウマビル

イ　採録した呼び名

・　大型であること　　ウシビル、ウマビル、オービル、オヤビル、ドンビル

※　ダンゴビル、ドンビ、ドンビン、ドンビンタン

・　体　色　　シマビル

・　その他　　カミナリヒル、マビル、マンビル

ウ　呼び名の状況

主として水田や池に生息し、人に付かない大型の水生ヒルの呼び名としては、「ウシビル」や「ウマビル」をはじめ計9種を採録した。

対象種としてはウマビルがあげられ、大型のものは人に付かないとされたほか、一般的には血を吸い膨張したものを指す「ドンビル」も人によっては本種の呼び名としても使用されていた。

e) 川にいるヒル

ア　対象種

上流部（河川敷）　コウガイビル

中下流部（水中）　ハバヒロビル、ヒラタビル、チスイビル等

イ　採録した呼び名

・　生息場所　　カワビル（上中流部で採録）

・　形　状　　ベタビル（中流部で採録）

ウ　呼び名の状況

河川に生息するヒルの呼び名としては、「カワビル」の「ベタビル」の計２種を採録した。

こうしたヒルは住民にはあまり認識されていなかったようで呼び名も一般的ではなく、また河川上流部と中流部では対象種が異なった。

河川上流部では「カワビル」の１種を採録し、河川敷の石の下で見かけられ、人に付かないものと認識されていた。対象種としてはウズムシ類のコウガイビルである。

河川中流部では「カワビル」と「ベタビル」の計２種を採録したが、集落や人により人に付くものと付かないものに分けられ認識されていた。

人に付くものとしては、「カワビル」を採録し、それは川の水が淀んだ所にいて、対象種としてはチスイビルがあげられる。よく似た形状のシマイシビルも混同され同様に見なされた可能性がある。

人に付かないものとしては、「ベタビル」と「カワビル」の２種を採録し、それらは石に張り付いた姿で見かけられ、対象種としてはハバヒロビルとヒラタビル等があげられる。

f) 山林にいて人に付く陸生ヒル

ア　対象種

ヤマビル

イ　採録した呼び名

・　行動様態　　サルビル

・　生息場所　　ヤマビル

ウ　呼び名の状況

山林にいて人に付く陸生ヒルの呼び名としては、「ヤマビル」と「サルビル」の計２種を採録した。対象種としてはヤマビルがあげられる。

g) 山、畑又は、畔にいて、大型で人に付かない陸生ヒル

ア　対象種

クガビル、キバビル

イ　採録した呼び名

・　大型であること等　　ウマビル、クマビル、マビル、ヤマビル

ウ　呼び名の状況

当時地域に広がった山林、畑、また田の畔等で見かけられ、人にはつかない少し大型の陸生ヒルの呼び名としては、「ヤマビル」や「マビル」をはじめ計４種を採録した。

対象種としてはクガビルとキバビルがあげられる。

ミミズ似、触れば丸くなる等、人により異なった形態等の説明とともに、一部の人からはとても大型の個体の話もみられた。

⑥-2 ヒル（種別区分）

a）チスイビル（ヒル綱ヒルド科）

ア　対象種

チスイビル

イ　生息情報

ほとんどの全集落

ウ　採録した呼び名

・　生息場所　　カワビル、シノダビル、タビル、ターービル、タンボビル、ノマビル

・　その他　　カミナリヒル、カミナリビル、シマビル、マビル

・　血を吸い膨張した状態　　ダンゴビル、ドンビ、ドンビル、ドンビン、ドンビンタン

（※　牛馬に付く　ウシビル、ウマビル）

エ　生息及び呼び名の状況

水田や池といった水辺に生息し、体長3～4cm程度で人の足などにつき血を吸う水生ヒルであり、水温の低い山間の一部を除く郡内のほとんどの集落に生息した。ウマビルとも当時多数生息したが、ほ場整備に伴う乾田化の進展や農薬使用等でほとんど見られなくなったものの、近年は水田で遊泳する姿が時折見かけられる。

本種の呼び名としては、「マビル」や「タンボビル」をはじめ計15種を採録した。

郡内では通常「ヒル」と言えば水田において人に付く本種を指し、それ以外の呼び名としては生息場所や様態等からの呼び名が多くみられた。

生息場所から「タビル」や「ターービル」とも呼ばれたほか、血を吸い膨張した状態のものは全域で「ドンビ」、「ドンビン」、「ドンビル」等と呼ばれた。そのほか、「マビル」や「シマビル」、また、一旦人につくと「雷が鳴らんことには落ちない」等と例えられ「カミナリヒル」等とも呼ばれた。

一方、集落や人によっては農耕用の牛や馬の足に付いたものが「ウシビル」や「ウマビル」と呼ばれる場合がしばしばみられ、それらは実態上本種であるが、ウマビルとの混同であるため、参考に記すにとどめた。

なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町山女原では「ミズヘル」を採録した。

オ　その他

「ドンビ」や「ドンビン」等は形態がはっきりしないものを指し、他に生まれたてのネズミや鳥の子、大きくなり過ぎたナスビ等を形容する言葉としても広く使われたが、「ドンビル」はヒルにのみ使用された。

そのほか、昔は手足を腫らした人がヒルに血を吸わせていたという話に加え、本種の生態に関して次の伝承等を採録した。

・　「ヒルに塩」

・　「ヒルも夜光る」

・　「我が身知らずにヒルみたい」（ヒルのように食べると体に良くない）

b) ウマビル（ヒル綱ヒルド科）

ア　対象種

　　ウマビル

イ　生息情報

　　ほとんどの全集落

ウ　採録した呼び名

・　大型であること　　ウシビル、ウマビル、オービル、オヤビル、ドンビル

・　体　色　　シマビル

・　その他　　カミナリヒル、マビル、マンビル

(※生息場所　　シノダビル、タビル、タービル、タンボビル、ノマビル)

エ　生息及び呼び名の状況

水田や池といった水辺に生息し、緑色の体色にはっきりとした筋の入ったやや大型の水生ヒルである。

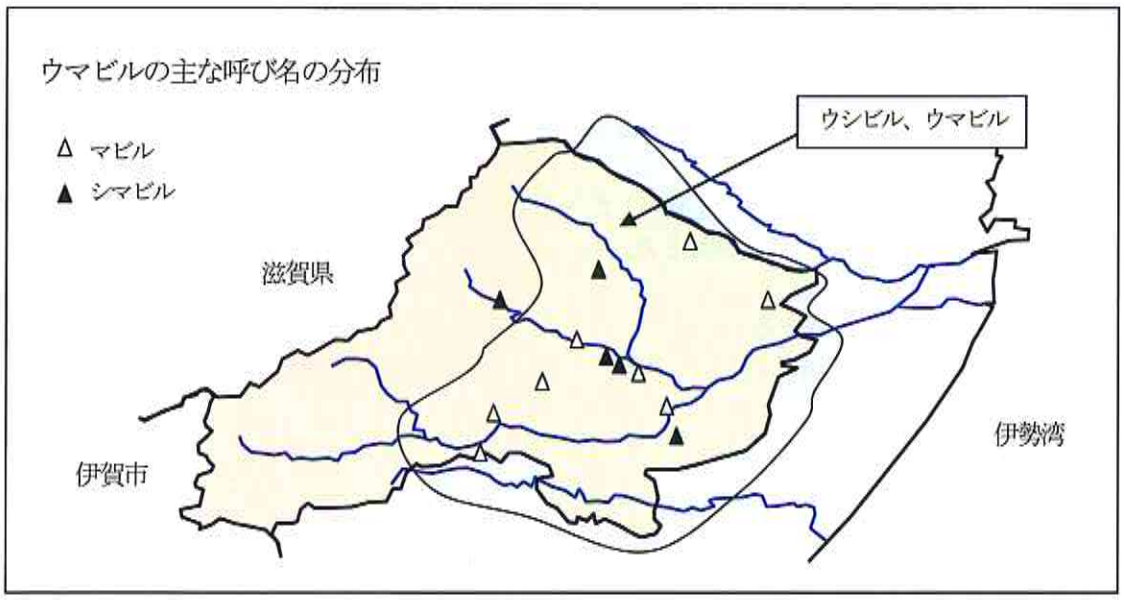
小型のチスイビルと異なり、人につかず淡水生巻貝を捕食する生き物であり、水温の低い山間の一部を除く郡内のほとんどの集落に生息した。

本種の呼び名としては、「ウシビル」や「ウマビル」をはじめ計９種を採録した。

水田でよく見かけられた大型のヒルは人に付かないものと認識され、郡内全域で「ウシビル」、「ウマビル」等と呼ばれ、チスイビルと区別されていた。大型であることから「オービル」、「オヤビル」とも呼ばれ、本来、血を吸い膨れ上がったヒルの呼び名である「ドンビル」も集落や人により本種の呼び名として使われていた。

一方、チスイビルとの混同もよくあったようで、「シマビル」は人の付くことの有無の回答が集落や人により異なる場合や、また本種はチスイビルより大型であることもあり、人に付かないにもかかわらず、一旦人に付くと「雷が鳴っても落ちない」、「雷が鳴らんことには落ちない」等と言われより恐れられ、「カミナリヒル」と呼ばれる場合も少なからずみられた。

そのほか、水田にいるヒルの呼び名である「タビル」、「タービル」等も生息場所が同じであることから本種を含めた呼び名でもあるが、主としてチスイビルを指すものであることから、参考に記すにとどめた。



c) ハバヒロビル（ヒル綱ウオビル目グロシフォニ科）

ア　対象種

　　ハバヒロビル、ヒラタビル

イ　採録した呼び名

・　生息場所　　カワビル

・　形状　　ベタビル

ウ　呼び名の状況

　河川中下流部に生息し、体長１～2 cm程度と小型で扁平な形をし、石に張り付き、人に付かない水生ヒルである。

ハバヒロビル

　本種の呼び名としては、「カワビル」と「ベタビル」の計２種を採録した。

　一部の人からの採録であり、郡内では認識、呼び名とも一般的なものではなかった。

　対象種としては、ハバヒロビルとヒラタビルであるが、「カワビル」は人によってはシマイシビルを含むものと考えられる。

d) ヤマビル（ヒル綱ヒルド科）

ア　対象種

　　ヤマビル

イ　生息情報

　　山林が広がった一部の集落

ウ　採録した呼び名

・　行動様態　　サルビル

・　生息場所　　ヤマビル

エ　生息及び呼び名の状況

　山林等に生息し、体長３cm程度で人や動物につく吸血性の陸生ヒルで、奥山で木の上から落ちてくるもの、また山道の脇にいて人につくものと認識されていた。

　現在は鈴鹿山系の山林に多く生息する。当時は鈴鹿山系の奥山のほか、平地で山林の広がった所にも生息数としては少ないながら生息していたが、住民が通常出入りするような身近な山林にはほとんど生息していなかったようである。そのため、猟や炭焼きで奥山に入った一部の人や平野部にある深い山林で作業した人など、ごく限られた人たちからの被害の話以外は生息情報はなく、一般の住民からはほぼ認識されていない生き物であった。

　本種の呼び名としては、「ヤマビル」と「サルビル」の計２種を採録した。

　郡内では、山間の集落などで「ヤマビル」と呼ばれたほか、山猟師や炭焼きで山に入った人たちの間で、道の脇にいて人の足に飛びつくことから「サルビル」とも呼ばれたという。

　一方、当時、郡内ではほとんど認識されていなかったことから、「ヤマビル」はより大型の他種であり同様に山で見かけられたコウガイビルやクガビル・キバビルの呼び名ともされていた。

　なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町山女原では「ノベル」を採録した。

e) クガビル又はキバビル（ヒル綱イシビル科）

ア　対象種

クガビル、キバビル

イ　生息情報

山林が広がった集落

ウ　採録した呼び名

・　大型であること　　ウマビル、クマビル、ヤマビル

・　その他　　マビル

クガビル

エ　生息及び呼び名の状況

山林や畑などで見かけられ、人に付かずミミズなどを捕食する比較的大型の陸生ヒルである。

当時、地域に広がった山林や隣接する畑などに広く生息したようであるが、人目につきにくい場所にいたこと等からよく認識されたという生き物ではなかった。

本類の呼び名としては、「マビル」や「ヤマビル」をはじめ計４種を採録した。

見かけられる場所や通常のヒルより大型であることから「ヤマビル」又は「クマビル」と呼ばれたほか、一部で「マビル」、また人によっては「ウマビル」とも呼ばれた。

本類は一般住民の認識は低いものの、山林や山畑での仕事で本類を認識していた人の話や、山林等に人に付かない大きなヒルがいたという伝聞での話を合わせると、広い範囲に生息したことが伺える一方、実際の生息状況としてははっきりとしない部分が残る。

当初、調査対象としておらず、本調査の末期から聴き取りを行った生き物であることから、聴き取りが十分ではなく、ウマビルやコウガイビルとして先に採録した呼び名の一部も本類である可能性が残るとともに、「ヤマビル」が本類の他、コウガイビルや人に付くヤマビルにも共通することから、聴き取り内容に混同がある可能性が残る。

人が山林内に入ることが少なくなった現在では、本類の生息状況を知る人はほとんどいないようである。

オ　その他

・　「人の血は吸わないが、ヤマビルは怖い」という話を採録した。

クガビル又はキバビルの呼び名の分布

3) 扁形動物類

① コウガイビル（ウズムシ綱コウガイビル科）

ア　対象種

クロイロコウガイビル

イ　生息情報

全集落

ウ　採録した呼び名

- 生息場所　　オカビル、カワビル、ノビル、ハタケビル、ヤマビル
- 形　状　　クギビル、テンビンビル
- その他　　アマビル、イマビル、テンビル

エ　生息及び呼び名の状況

半月状の頭部を持ち黒に近い体色で、体長は長いもので20～30cmとなるヒル様の生き物である。人家の小さな庭石の下で折り重なったような姿でしばしば見かけられるほか、川や畑、山林内の少し湿気た所にもいたようで、現在も郡内全集落に生息する。

郡内においては一般的な和名のとおりヒルの一種と認識されていたが、チスイビルと異なり扁形動物であるウズムシ類の一種であり人には付かない。

本種の呼び名としては、「ハタケビル」や「ノビル」をはじめ計10種を採録した。

生息場所や形状等からの呼び名が多くみられ、同一集落であっても見かけられた場所により異なる呼び名で呼ばれていたようである。

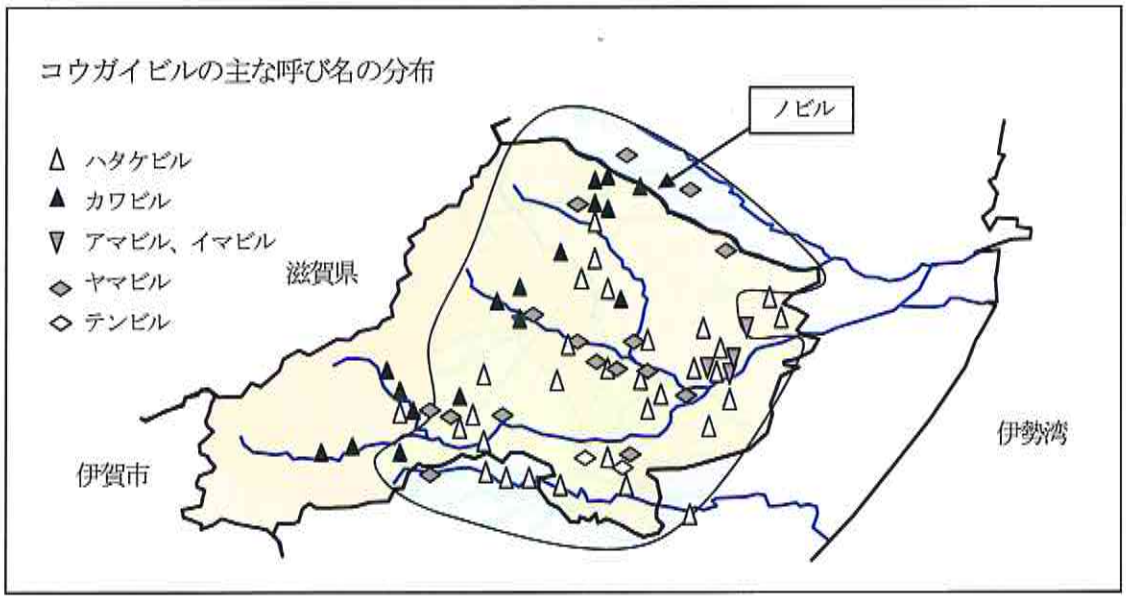
加太・坂下地区を除く郡内の広い地域で「ノビル」と呼ばれたほか、集落数は限られるものの広域で「ハタケビル」がみられた。地域的には庄野地区を中心に「アマビル」や「イマビル」、安楽川流域の集落では山林内で見かけられる場合は「ヤマビル」、また山間部の集落ではよく河川敷の石の下で見かけられたようで「カワビル」とも呼ばれた。そのほか、一部の集落で形状から「クギビル」や「テンビンビル」、「テンビル」等がみられた。

なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町山女原では「ヘラベル」を採録した。

オ　その他

人によっては、様態がヒルに似ていることからチスイビル同様に人に付くと誤認されている場合もみられたほか、ミミズと関係して次の伝承を採録した。

- 「大きなミミズがイマビルになる」



4) 類線形動物類

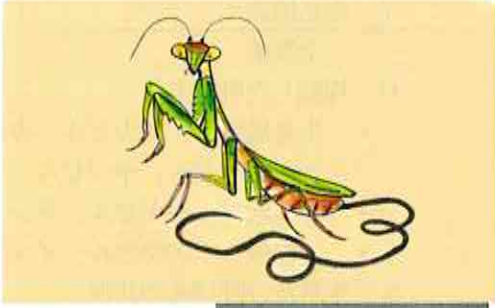
① ハリガネムシ（ハリガネムシ綱ハリガネムシ目）

ア　対象種

ニホンザラハリガネムシ、オカダハリガネムシ

イ　生息情報

全集落



ウ　採録した呼び名

- 巻きつくこと　　アシマキ、イトマキ、イビマキ、チンチンマキ、チンボマキ、マキ、ユビマキ
- 腹から出てくること　　サンバサン
- 形　状　　ナガムシ、ハリガネ、モッテ、モッテン
- その他　　カイチュー、ショーネン、ヒャクヒロ

エ　生息及び呼び名の状況

溝川の中などに生息するが、カマキリやバッタ類の寄生虫でもあり、当時はそれらの尾部から出ている姿でよく見かけられたという細長いハリガネ状の水生生物である。現在ではそうした姿で見かけることが少なくなったが郡内のほぼ全集落に生息するものとみられる。

本種の呼び名としては、「アシマキ」や「モッテン」をはじめ計15種を採録した。

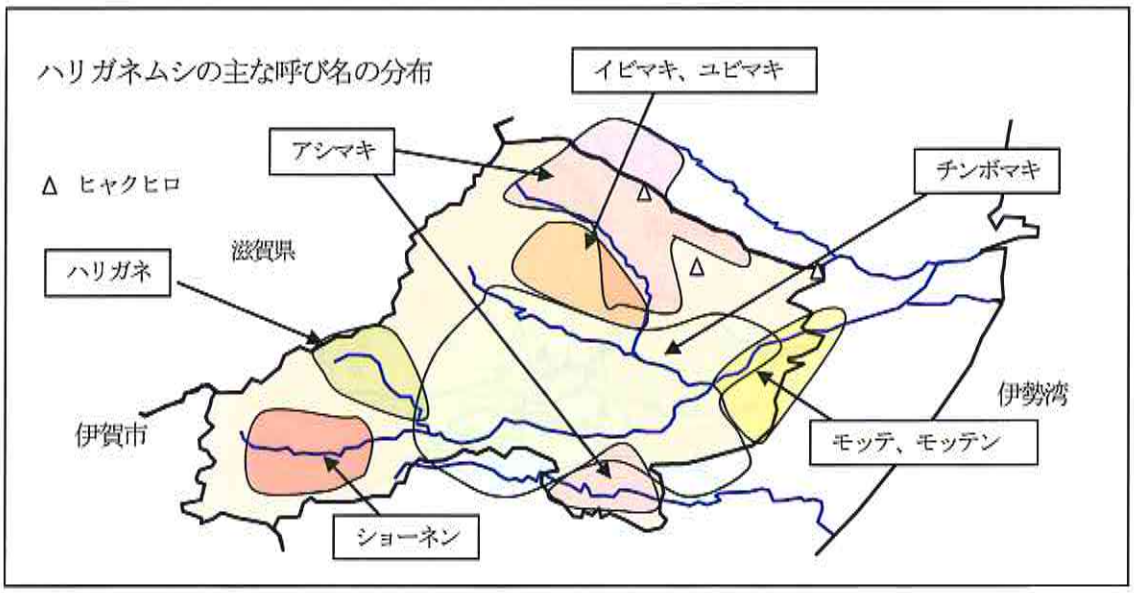
郡内では地域毎に異なる主として6つの呼び名がみられ、郡中央の広い地域では俗称で呼ばれたほか、昼生地区と椿・深伊沢地区を中心とした地域は「アシマキ」、庄内地区は「ユビマキ」、牧田・庄野地区周辺は「モッテン」、加太地区は「ショーネン」、坂下地区は「ハリガネ」と呼ばれた。また、一部の集落で「ヒャクヒロ」、「サンバサン」等がみられた。

なお、隣接地域として調査を行った鈴鹿市三宅町では「イビマキ」、同市木田町では「モッテン」、四日市市山田町では「シリマキ」、甲賀市土山町山女原では「イトヘル」、伊賀市柘植では「ゴム」を採録した。

オ　その他

当時の高齢者から本種はとりわけカマキリの尾部から出ている姿でよく認識されていたようで、そうした話に関係して次の伝承を採録した。

- 「カマキリの卵の中にアシマキがたくさん入っている」と言った。



(4) その他

調査対象ではなかったが一連の聴き取りの中で、次のものを採録した。

① ムカデ類（節足動物）

a) 小型のムカデ（イッスンムカデ（イシムカデ目イッスンムカデ科））

ア　対象種

イッスンムカデ

イ　採録した呼び名

・　体　長　　イッスンムカゼ、イッスンムカデ

ウ　呼び名の状況

調査対象とはしなかったが、一連の聴き取りの中で小型のムカデの呼び名として「イッスンムカゼ」と「イッスンムカデ」の計2種を採録した。

対象種としてはイッスンムカデがあげられる。

山林内に生息し体長2～3 cm程度の小型のムカデある。

b) 大型のムカデ（トビズムカデ（オオムカデ目オオムカデ科））

ア　対象種

トビズムカデ

イ　採録した呼び名

・　体　長　　サンスンムカゼ

ウ　呼び名の状況

調査対象とはしなかったが、一連の聴き取りの中で小型のイッスンムカデに対し、大型のムカデの呼び名として「サンスンムカゼ」の1種を採録した。

対象種としてはトビズムカデがあげられる。

主に山林に生息し、人家近くでも見かけられ、大きくなると体長20 cmともなる大型のムカデである。

「サンスンムカゼ」は郡内の離れた集落で採録したことから、広域で使われた呼び名の可能性がある。

なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町山女原では「トノサマムカゼ」を採録した。

エ　その他

「イッスンムカゼとサンスンムカゼがいて、大きい方を焼酎の中に入れれば、その焼酎は傷薬になる」と言ったという話のほか、本種の出現に関して次の伝承を採録した。

・「ムカデが家（の中）に入ってくると雨が近い」

② 湿気た所にいる虫

ア　対象種

ゲジゲジ、カマドウマ、ダンゴムシ、ワラジムシ等

イ　採録した呼び名

・　生息場所　　シケムシ

ウ　呼び名の状況

ゲジゲジやダンゴムシ等人家内外の湿気の多い所に生息する昆虫等である。

本類の呼び名として「シケムシ」の1種を採録した。

郡内でよく使われた一般的な呼び名である。

③ 縁の下にいる虫

ア　対象種

ゲジゲジ、カマドウマ等（詳細不明）

イ　採録した呼び名

・　生息場所　　エンノシタムシ

ウ　呼び名の状況

ゲジゲジ、カマドウマ等人家の縁の下に生息する昆虫等である。

本類の呼び名として「エンノシタムシ」の１種を採録した。

対象種はシケムシとほとんど変わりないと考えられるが、よく使われる一般的な「シケムシ」に比べほとんど使われず、一部の集落でのみ呼び名がみられた。

④ 藁のある所にいる虫

ア　対象種

コオロギ、ダンゴムシ、ワラジムシ等

イ　採録した呼び名

・　生息場所　　ワラムシ

ウ　呼び名の状況

コオロギやワラジムシ等藁下の湿気た所に生息する昆虫等である。

本類の呼び名として「ワラムシ」の１種を採録した。

「シケムシ」と異なり、一部の集落でのみ呼び名がみられた。

⑤ その他不明種等

その他の生き物及び種別が不明な生き物の呼び名として採録したものは次のとおりである。

・「アカゴ」：アカムシユスリカの幼虫
・「イタイ」：白いうじ虫のような虫
・「サル」：麦につく銀色がかった１cm程の虫
・「シラコ」：桑の木の葉の裏につく白い虫（クワキジラミの幼虫）
・「スナモグリ」：水気のある砂に潜る虫
・「ボーフリ」：蚊の幼虫
・　能褒野川（安楽川橋から小田にかけての安楽川の一部の古称）の川底の砂に穴が開いていて、小さなものをほりこむと食べに出てくるタニシのような大きさの貝が昔いた。